

第2章

東近江市の概要

- 1 自然環境
- 2 社会的状況
- 3 歴史的変遷

1 自然環境

(1) 位置と環境

本市は、滋賀県の南東部に位置し、京阪神と中京圏とのほぼ中間に位置します。北は彦根市、愛荘町及び多賀町と、南は竜王町、日野町及び甲賀市と、西は近江八幡市と接しており、東は三重県いなべ市及び菰野町と接します。地形は東西に長く、市域東部には御池岳をはじめとする標高1,000メートル級の鈴鹿山脈が連なり、西は日本最大の湖、琵琶湖を有します。また、市の中央を愛知川が流れ、南西部には日野川も流れます。これらの河川の流域には、広大な平地と丘陵地が広がる湖東平野が形成され、平野部はさながら「緑の海」を思わせる豊かで広大で美しい田園地帯が広がり、その中にきぬがさやま 織山やみつくりやま 箕作山等の孤立山塊が島のように点在します。

市の総面積は388.37平方キロメートル(滋賀県総面積の約9.7パーセント)で、地目別にみると、山林が56パーセント、農地が22パーセント、宅地は6パーセントとなっています。



東近江市の位置

(2) 気候

滋賀県は日本海型気候区と太平洋型気候区、瀬戸内型気候区が相接した位置にあります。また、若狭湾、伊勢湾、大阪湾が湾入した地峡部であり、近江盆地の中央に琵琶湖が存在す

るなど、複雑な地形要素が加わり、変化に富んだ気候となっています。その影響を受け、本市の気候は北部、南部、東部で異なる特性を有しています。

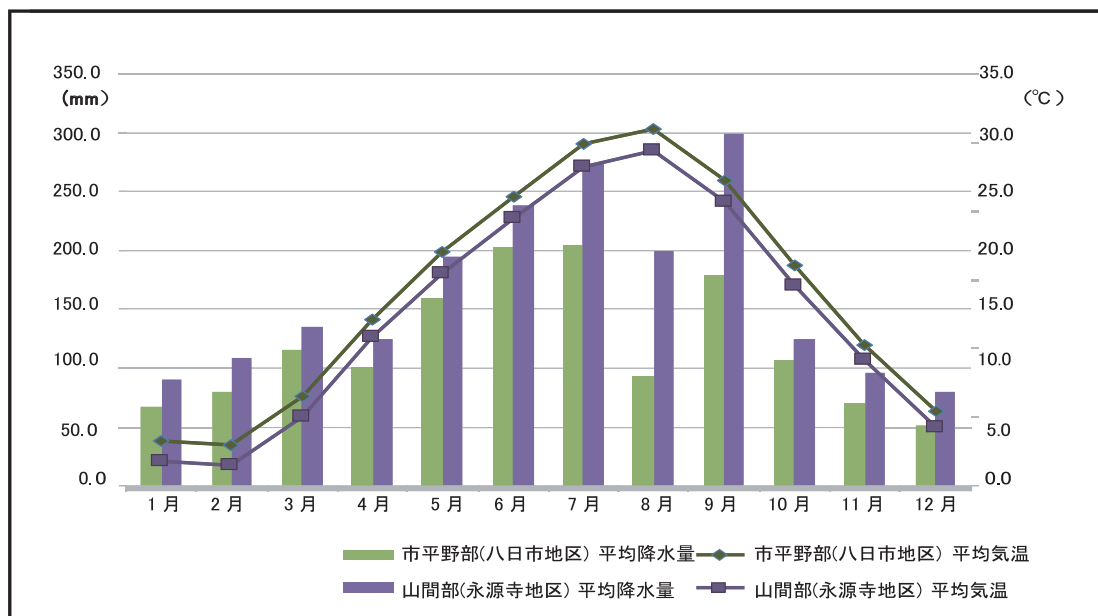


山間部の集落(君ヶ畑)

市域北部では日本海型気候の影響を受け、冬季には北西の季節風が強く、若狭湾から流れる雪雲の通り道となるため、毎年降雪をみます。一方、市域南部は太平洋型気候の影響を受け、夏季には高温多湿となりますが、琵琶湖の影響によって比較的緩和され、気温の年較差、日較差が大きい内陸性気候の特性を示します。また、市域東部では、夏季には伊勢湾からの暖かく湿った空気が鈴鹿山脈で積乱雲を形成し、冬季には若狭湾から吹き込む寒気が上昇気流によって雪雲を発達させ、大雪に見舞われるなど、年間を通じて雨量、降雪量が多いといった特性がみられます。

市域全体の年平均気温は15度前後、年間降水量は1,440ミリメートル程度ですが、上記のような地域差がみられ、市域東部の山間部では市の平均気温よりも1～2度低く、降水量も1割ほど多くなります。特に、台風時期である8月、9月には、月平均降水量の倍近い雨量を観測します。また、積雪についても、平野部が20センチメートル前後であるのに対し、山間部では1メートルを超えることも珍しくなく、本市の気候は地域によって大きく異なっています。

市域全体の年平均気温は15度前後、年間降水量は1,440ミリメートル程度ですが、上記のような地域差がみられ、市域東部の山間部では市の平均気温よりも1～2度低く、降水量も1割ほど多くなります。特に、台風時期である8月、9月には、月平均降水量の倍近い雨量を観測します。また、積雪についても、平野部が20センチメートル前後であるのに対し、山間部では1メートルを超えることも珍しくなく、本市の気候は地域によって大きく異なっています。



東近江市平野部(八日市地区)と山間部(永源寺地区)の平均降水量と平均気温

(3) 地形

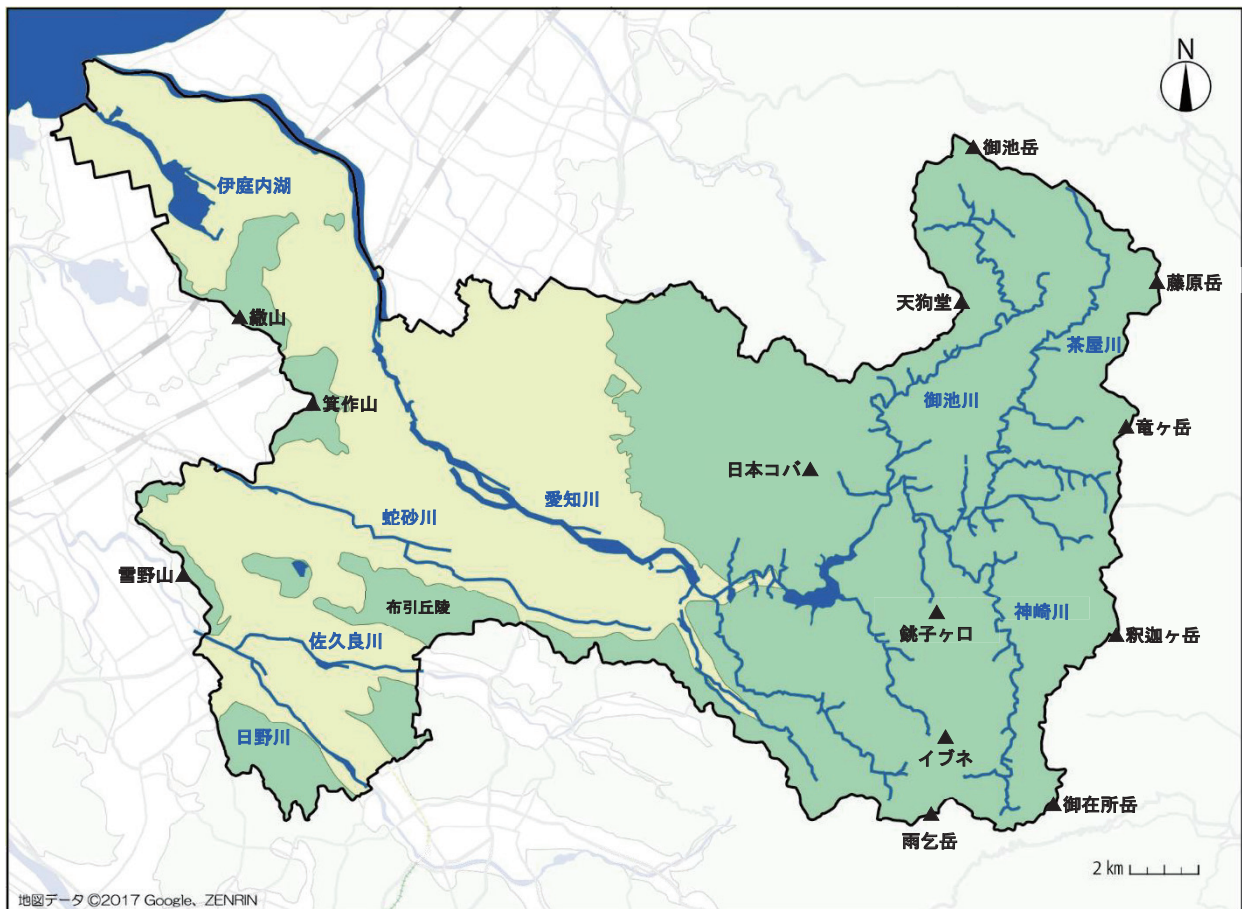
本市の地形は東西に細長く、東西33.3キロメートル、南北26.4キロメートルのつづみ型をしています。市域東部には鈴鹿の山々が連なり、中部から西部にかけては平地・干拓地が広がります。平野部には山塊が点在し、本市の特徴的な景観を構成しています。

市内には愛知川をはじめ、日野川、蛇砂川等、大小多くの河川が流れますが、大きくは愛知川水系と日野川水系に分かれます。

市域の中央を流れる愛知川は、藤原岳に水源を持つ茶屋川を源流とし、御在所岳を源流とする神崎川と御池岳を源流とする御池川と合流して愛知川となります。これら山間部の流域では、河川の流下が速いため川筋に急峻な峡谷が形成されています。平野部に出ると流域に広大な扇状地を形成し、その土砂を浸食しながら河岸段丘面(高位段丘、中位段丘、低位一段丘、低位二段丘)が形成されます。扇状地では河川の多くは伏流しますが、標高110メートル付近の扇端部から再び湧出し、水量を増しながら流下します。その後、蛇行を繰り返しながら琵琶湖へと流れますが、織山によって堆積が阻まれた水域は内湖(大中の湖)として残されました。現在、その大半は干拓されて姿を消しましたが、その一部が伊庭内湖として残されています。

一方、日野川は鈴鹿山系の綿向山に源を発し、日野町域を西流したのち、本市南西部を北西に流れます。同山を源流とする佐久良川をはじめとする小河川と合流を重ねながら、竜王町、野洲市、近江八幡市域を流下したのち琵琶湖へと注ぎます。日野川流域にも扇状地が広がり、小規模ながら河岸段丘が形成されています。

このように、本市の地形は、鈴鹿山脈と愛知川・日野川によって形作られています。

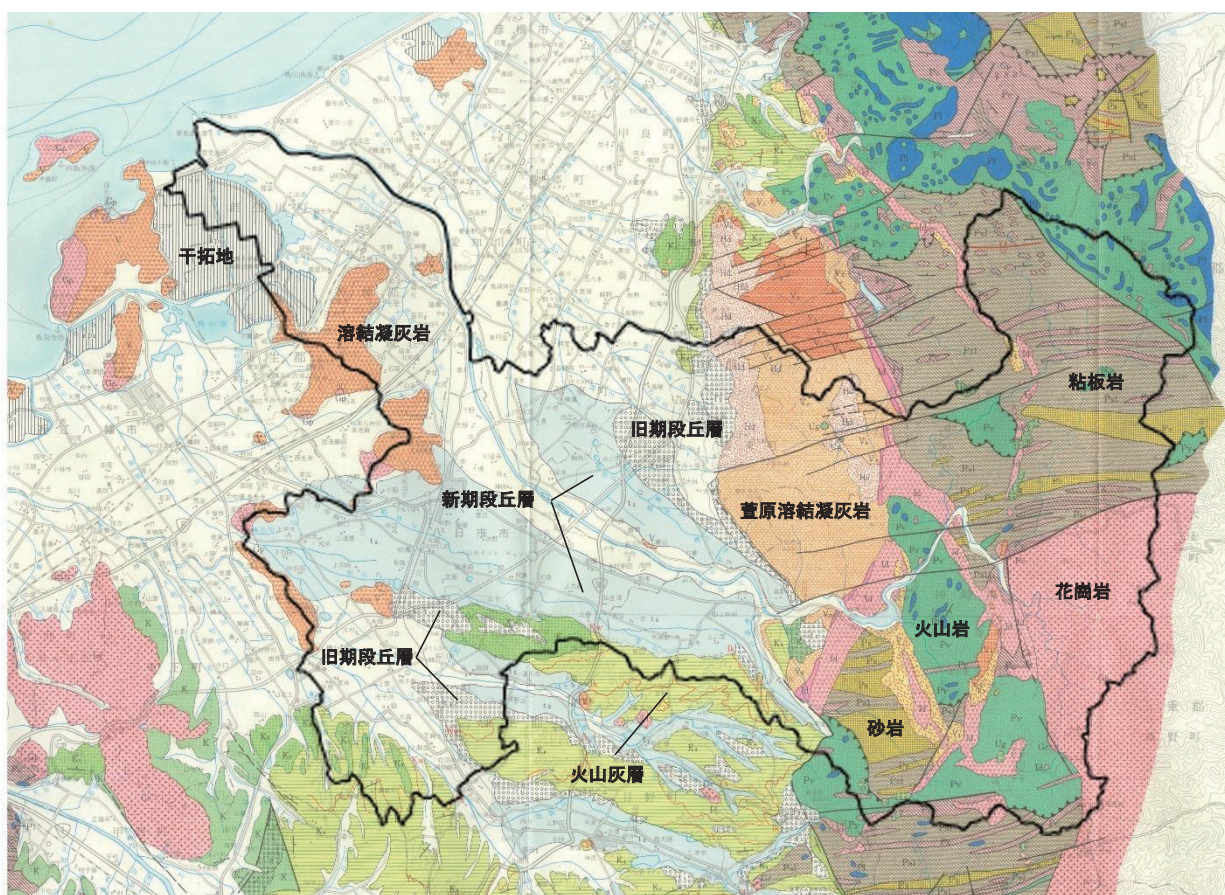


東近江市の山と水系

(4) 地質

古生代といわれる2億年前、本市域は海の底にありました。鈴鹿山脈の北部から東部にかけてはこの地域で最も古い岩石とされる輝緑凝灰岩きりよくぎょうかいがんと石灰岩が分布しており、石灰岩の中には古生代の海に生息していたフズリナやウミユリ等の化石をみることができます。これらの岩石は現在の赤道付近で形成され、大陸移動によって現在の位置に辿り着いたと考えられます。

7,700万年前の中生代白亜紀には、滋賀県全域が活発な火山活動域となりました。地表では大規模な火山活動が起こり、堆積物である流紋岩類の厚い地層が造られ、市域を含む湖東地域に多くみられることから湖東流紋岩と呼ばれています。市域の平野部に点在する織山きぬがさやま、箕作山みつくりやま、雪野山等も湖東流紋岩からできています。また、地下深部では、白亜紀から新生代古第三紀にかけてマグマが岩石の中に貫入して花崗岩の層となりました。花崗岩は鈴鹿山脈南部から大津市の田上、比叡及び比良の各山地にかけて広がっています。



今から400万年前、現在の三重県伊賀市付近に琵琶湖の原型である大山田湖が誕生しました。その後の地殻変動により、甲賀湖(甲賀市)、蒲生湖(東近江市)と形、大きさを変えながら北へと移動しました。今から100万年前になると、鈴鹿山脈が徐々に隆起し始め、現在の近江盆地が形作られ、堅田丘陵(大津市)付近に沼沢が形成されました。そして40万年前には、湖西の山地に沿った断層の活動が活発になり、比良山や比叡山がその高さを増す一方、琵琶湖域は沈降を始め、現在のような広くて深い湖が形成されました。

なお、上野盆地から近江盆地にかけて存在した琵琶湖の堆積層と、湖周辺の平野や扇状地に積もった地層を古琵琶湖層群といいます。

(5) 植生

市内で最も多くの植物種を確認できるのは鈴鹿山脈です。日本海側要素、太平洋側要素、^{そはやき}襲速紀要素(九州中南部・四国南部・紀伊半島・東海地方に分布の中心がある、又はこの地域に特徴的な植物)等の多種多様な植物がみられ、その数は2,000余種に上ります。

これほど多くの種が見られるのは、若狭湾と伊勢湾の地峡部に位置するという地理性、日本海側気候と太平洋側気候という2つの異なる気候の影響、石灰岩や輝緑凝灰岩、^{きりよくぎょうかいがん}花崗岩といった山脈を形成する多様な地質等の要因が挙げられます。森林相としては、山麓から標高800メートル辺りまでが暖温帯性の常緑広葉樹が目立つヤブツバキ域、そこから頂上までが冷温帯性の落葉広葉樹に常緑針葉樹を交えたブナクラス域となります。ブナクラス域にはシイ、カシ、コナラ、スギ、ヒノキ、ブナ等が見られますが、その多くは人工林で、天然林は御池岳山頂付近のオオイタヤメイゲツ林だけです。なお、このオオイタヤメイゲツ林は、昭和58年(1983)に「21世紀に残したい日本の自然100選」に選定されています。

スギやヒノキ等は古くから寺社をはじめとする建築に使われており、シイやカシ、コナラは薪炭や木地の材料として伐採し、経済性を高めるためにスギ、ヒノキに植え替えるなど、人間の営みによって現在の森林相が形成されたと言えます。



一方、平野部の^{えちがわ}愛知川中流域から下流域には^{かへんりん}河辺林が存在します。河辺林は洪水時の防災林や緩衝林として機能し、樹木は薪として、落葉や下草は肥料として利用されるなど、人びとにとって重要な存在でした。しかし、土地開発や河川改修によりその多くは消滅し、今では貴重な存在となっています。植生は照葉樹林帯に属しますが、ケヤキやムクノキ、クヌギ、コナラ、ナラガシフなどの落葉広葉樹と、マダケ等の竹が混交しています。また、絶滅危惧植物であるクマガイソウやコシオガマ、カワラサイコ、ツチアケビ、エビネ、ミヤマカタバミ等の山地性植物も生育しています。

また、湖岸部ではエビモ、カナダモ、セキジョウモ等の沈水植物や、ヒシ、ガガブタ、アサザ等の浮葉植物が見られます。また、ヨシやマコモ等の抽水植物帯(ヨシ帯)が広がり、その内陸にはヤナギやハンノキ等の湿生林が生育しています。かつて、日本を「^{とよあしほら}豊葦原の^{みづほ}瑞穂の国」と呼んでいたことから分かります。ヨシ群落のある水辺景観は日本の「原風景」であり、本市の特徴的な景観の一つとなっています。



オオイタヤメイゲツ林



内湖畔のヨシ群落

(6) 動物

本市には、鈴鹿山脈から琵琶湖まで様々な自然環境が存在するため、多種多様な動物が生息します。特に、鈴鹿山脈は多様な植生と地形を反映して、多種の動物が数多く生息しています。

ア 哺乳類

^{えちがわ}愛知川や日野川の源流域には、ニホンザル、ニホンジカ、ニホンカモシカ、イノシシ、ホンドタヌキ、ホンドキツネ、ツキノワグマ、アナグマ、ホンドテン、ニホンイタチ、ムササビ、ホンドリス、ニホンノウサギ、アカネズミ等のネズミ類、ヒミズ等のモグラ類、蝙蝠類の哺乳類が生息しています。

特に、鈴鹿山脈は国の特別天然記念物であるカモシカの生息域となっており、山深い河川の源流域で目撃されています。しかし、近年はニホンジカが急増し、カモシカは減少しています。



ニホンカモシカ

イ 鳥類

鳥類では、森林生態系ピラミッドの頂点に位置するイヌワシとクマタカが生息していますが、戦後の急激な人工林化や茅刈り場等の人為的開放地が激減したため絶滅の危機に瀕しています。

鈴鹿山脈には比較的夏緑広葉樹林が多く水系も多いため、クロツグミ、オオルリ、アカシヨウビン等の夏鳥が繁殖しています。留鳥としては、夏緑広葉樹林を好むアオバト、アオゲラ、コゲラ、ヤマガラ、ヒガラ、コガラ、イカル等が安定して生息しており、渓谷にはミソサザイ、ヤマセミが生息しますが、ヤマセミは近年数が減少しています。また、冬の森林にはアトリ、シロハラ等の冬鳥が多数飛来します。

山間部から丘陵地にかけては、留鳥の猛禽^{もうきん}であるオオタカ、ハイタカ、ツミが生息し、夏鳥として飛来するサシバ、ハチクマが繁殖します。織山の支峰である猪子山山頂では、例年9月から10月頃にかけてサシバやハチクマ等のワシタカ類の「渡り」が見られ、多い年には1万羽を超えるタカ類が渡ってきます。

一方、愛知川^{えちがわ}や日野川等の流域には、魚食性のアオサギ、コサギ等のサギ類やカワセミ、トビが広く分布し、近年はカワウの固体数が増加しています。平野部の農地には、留鳥としてヒバリ、ムクドリ、ケリが生息し、冬には猛禽のノスリ、チョウゲンボウのほか、ツグミ、タゲリ等の冬鳥が越冬します。

伊庭内湖^{いばないこ}や愛知川河口付近には、留鳥としてカイツブリ、サギ類が生息し、夏鳥としてオオヨシキリ、ヨシゴイが主にヨシ原で繁殖します。冬には数多くのカモ類が越冬し、猛禽のチュウヒも越冬します。また、魚食性の猛禽であるミサゴも年間を通じて生息します。

ウ 爬虫類

爬虫類ではイシガメやクサガメ、スッポン等のカメ類や、マムシ、アオダイショウ、ジムグリ等のヘビ類、トカゲやカナヘビ、ヒガシニホントカゲ、ヤモリ等が生息しています。また、幻の蛇と呼ばれるシロマダラも確認されています。

エ 両生類

両生類では、ヤマトサンショウウオ、アカハライモリ、ナガレヒキガエル、モリアオガエル等が生息しています。

オ 魚類

魚類では、愛知川^{えちがわ}源流域で冷水を好むイワナ、アマゴ、カジカ(大卵型)等が生息し、イワナについては南限分布域の一つとなっています。中流域にはオイカワ、カワムツ、カワヨシノボリ、カマツカ等、多様な魚類が生息し、春から夏にはアユが、また、秋にはビワマスが琵琶湖から遡上して産卵します。下流域や琵琶湖の内湖である伊庭内湖^{いばないこ}には、コイ、ナマズ、ギンブナ等が一年を通して生息すると



イワナ

ともに、春から夏にはホンモロコ、ニゴロブナ、ゲンゴロウブナが沖合からやってきて産卵します。

また、溜池やその周辺の小川では、平成11年(1999)に環境省により絶滅危惧種Ⅱ類に指定されたミナミメダカ等が確認でき、湧水地では絶滅危惧種ⅠA類に指定されているハリヨも生息していますが、近年、生息場所は激減しています。

2 社会的状況

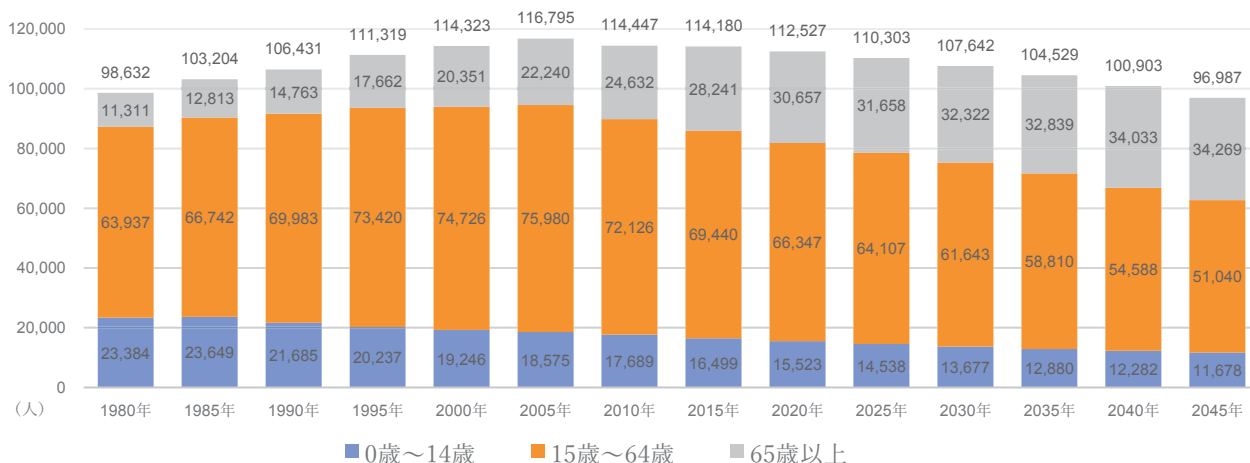
(1) 人口動向

本市の人口は、令和2年(2020)10月に行われた国勢調査では112,819人でした。人口の推移は、平成17年(2005)の116,797人をピークに、それまでの「緩やかな増加傾向」から「減少」に転じています。

さらに、国立社会保障・人口問題研究所が公表した推計(平成30年(2018)3月)によると、2045年には96,987人まで減少し、平成17年(2005)からの人口減少率は16.9パーセントとなり、40年間で19,000人以上減少すると予測されます。

一方、世帯数をみると、平成17年(2005)に37,846世帯であったものが、令和2年(2020)には42,899世帯と約13パーセント増加しており、一人世帯の増加や世帯分離が進行しているものとみられます。

本市の年齢3区分別の人口を見ると、生産年齢人口(15～64歳)は平成22年(2010)から減少傾向にあります。また、平成7年(1995)に老年人口(65歳以上)と年少人口(0～14歳)の逆転が始まっています。今後、老年人口は増加を続け、2045年には市全体の35.3パーセントが65歳以上となり、老年人口1人を生産年齢人口1.49人で支えることとなります。



東近江市の人口推計

『東近江市統計書』、『日本の地域別将来推計人口(平成30(2018)年推計』(国立社会保障・人口問題研究所)

本市の主な道路交通網として、市西部から中央部にかけて国道8号、307号及び名神高速道路が南北に縦断し、国道421号が東西に横断するなど、京阪神地域や中京地域との良好なアクセスを実現しています。

名神高速道路は昭和39年(1964)に開通し、八日市インターチェンジは市中心部への玄関口となっています。周辺には工業団地が整備され、大企業の物流拠点や大規模工場等が集中しています。また、平成25年(2013)12月には蒲生スマートインターチェンジが開設し、市西部の玄関口として、商工業への利便性が向上しました。

公共交通は鉄道、バスで構成されており、市域西部にはJR琵琶湖線の能登川駅があり、JR京都駅まで約40分、JR大阪駅まで約70分、JR名古屋駅までは約95分で結んでいます。地域内交通としては近江鉄道駅が13駅あり、近江バスは、JR駅を起点として4路線が市内を走行しています。さらに、市民の身近な交通手段として、コミュニティ交通の「ちょこっとバス」(定時定路線のバス)及び「ちょこっとタクシー」(予約制乗り合いタクシー)を運行しています。



東近江市の交通網

(3) 土地利用

本市の土地利用は、市域の56パーセントを山林が占め、田畑は約22パーセント、宅地は約6パーセントとなっています。また、交通の便に優れる名神高速道路の八日市インターチェンジ及び蒲生スマートインターチェンジ周辺には大規模な工場が立地し、それらを含む企業敷地等、その他の土地利用は約12パーセントを占めています。

(4) 産業

農業においては県下最大の農業生産額、近畿最大の耕地面積を誇り、水稲、麦、大豆はもちろん、野菜や果樹、畜産等、当地の気候風土を生かした農業が営まれています。

商業においては、近江鉄道八日市駅前区画整理事業やニュータウンの開発により発展してきた八日市駅周辺が中心市街地としての役割を担いつつ、近年開発が進んでいるJR能登川駅周辺や、名神高速道路八日市インターチェンジ周辺をはじめ、各地区に散在するロードサイドショップや郊外型店舗等があります。

また、工業においては、名神高速道路をはじめとした道路網の整備を契機に数多くの工業団地が造成され、工業基盤の拡充が図られてきました。現在、市内各地区に形成された工業団地を中心に、電気機器やIT関連工場等の企業や事業所が操業し、内陸工業地帯として発展しています。一方、国道8号沿線やJR能登川駅周辺では、豊富な湧水を利用して古くから繊維産業が栄えてきましたが、近年は海外からの安価な製品の輸入増によって、多くの事業者が廃業しています。

(5) 観光

本市では、鈴鹿の山々から琵琶湖へ広がる豊かな自然や歴史文化、特産等を資源とした様々な観光振興が図られています。

令和4年(2022)における本市の観光入込客数は2,441,821人で、道の駅あいとうマーガレットステーションは年間664,300人の入込客となっており、県下で7番目の多さです。また、文化財関係の観光地としては、百済寺ひゃくさいじや永源寺、太郎坊阿賀神社、五個荘金堂伝統的建造物群保存地区等が挙げられ、多くの観光客が訪れています。

本市の観光客の大多数は日帰り客で、宿泊客は5.6パーセントにとどまる(県平均7.6パーセント)など、滞在型観光の充実が求められています。



道の駅あいとうマーガレットステーション

3 歴史的変遷

(1) 原始（～弥生時代）

市内には523の遺跡が確認されており、最も古い遺跡は琵琶湖から離れた布引丘陵沿いにある玉緒遺跡、庚申溜遺跡、池之脇遺跡です。これらの遺跡からは後期旧石器時代のチャートやサヌカイトの剥片が採集されており、本市における人びとの営みは、旧石器時代にまで遡ります。続く縄文時代には、鈴鹿山麓の相谷熊原遺跡から草創期の竪穴住居跡と国内最古級の土偶等が見つかり、琵琶湖に近い大中の湖東遺跡からは早期から中期にかけての土器が、愛知川沿いの正楽寺遺跡からは後期の祭祀跡や土面が見つかるなど、各期を通じ、森や湖、川等の自然を背景に生活が営まれてきたことが分かります。また、弥生時代になると、愛知川下流域や日野川中流域で多くの遺跡が見られるようになります。湖岸に隣接する大中の湖南遺跡(近江八幡市)からは稲作に関する遺構や遺物が数多く見つかり、湖に近い能登川石田遺跡でも環濠や鋤、鍬、馬鍬等の木製農耕具が確認されるなど、湖岸を中心に米づくりが行われました。



正楽寺遺跡の発掘調査風景



能登川石田遺跡の遺物出土状況

(2) 古代（古墳時代～平安時代）

古墳時代になると、全国に前方後円墳が造られるようになり、市域でも雪野山山頂に大型の古墳(雪野山古墳、国史跡)が築かれました。副葬品や古墳の規模、築造場所等から、雪野山古墳は当地を治める首長の墓と考えられ、大和王権と政治的な関係があったことがうかがえます。また、中期になると平野部にも大きな古墳が造られ、雪野山東部の平野に木村古墳群(県史跡)が築かれました。同古墳群は5基以上の古墳で構成されており、当地を治めていた王墓群と考えられています。後期になると市内各地で古墳が築かれるようになり、織山や箕作山の山麓や愛知川河岸段丘上に群集墳が造られるようになります。

7世紀中頃、市域は蒲生、神崎(神前・甘作)、愛知(依智・衣智)評と呼ばれました。この頃、大和政権は朝鮮半島の百濟救済のために新羅・唐の連合軍と戦っていましたが、白村江の戦いに敗れると百濟から多くの人びとが倭国へ亡命し、市域にも多くの渡来人が移り住みました。愛知郡では善明寺阿弥陀如来坐像(重要文化財)胎内に渡来系氏族愛知秦氏の結縁名号が記され、百濟寺創建には百濟の僧が関わったとされています。また、神崎郡では愛知川中流域において灌漑水路掘削や溜池造成に渡来人が関わったとされ、八日市地区に伝わる

「高麗の長者伝承」は渡来系氏族にまつわるものと考えられています。さらに蒲生郡では、渡来系様式(階段式石室)を持つ天狗前古墳群が造られ、近隣の蛭子田遺跡からは壺・鏡等、在来と一線を画する遺物が出土するなど、渡来人の痕跡が数多く見られます。

奈良時代になると、近江は東山道に配されました。律令体制下での地方行政は、国の下に郡、郷が置かれ、国司には中央貴族が、郡司には地方豪族が任命されました。市域では地方豪族である佐々貴山君と依知秦氏が郡司に任じられ、神崎・蒲生郡、愛知郡をそれぞれ治めました。また、都に近い政治的・経済的・文化的影響を強く受け、とりわけ宗教では、最澄が比叡山に延暦寺を開いた後、市域でも盤座のある山々に天台寺院が開かれ、豪族の氏寺に代わって天台寺院が建立されるようになりました。

10世紀になると、奈良時代以来の戸籍制や班田収授制が崩壊し、開墾地の私有が認められるようになりました。11世紀の半ばには荘園が成立し、神崎郡には高屋荘、伊庭荘、栗見荘、山前北荘、同南荘、柿御園が、愛知郡には鯉江荘、岸本御厨、押立保が、蒲生郡には羽田荘、麻生荘、市子荘、綺田荘、得珍保、宮川保が設けられました。こうして、市域でも有力貴族や寺社が支配する荘園と、国が支配する公領(国衙領)とが併存する状態が続きました。



雪野山古墳石室



百濟寺仁王門

(3) 中世(鎌倉時代～室町時代)

12世紀に入ると、近江では佐々木氏が台頭し守護職に任じられます。佐々木氏は後に大原、高島、六角、京極の四家に分流しますが、惣領である六角氏が観音寺城を拠点に16世紀半ばまで近江守護を務めました。

また、室町時代には得珍保を拠点とする保内商人が活躍します。沓掛(愛荘町)、石塔、小幡(ともに本市)商人とともに四本商人と呼ばれ、八風峠や杉峠等、鈴鹿の山々を越えて商品を運んだことから山越商人とも呼ばれました。保内商人は六角氏の権力を後ろ盾に、他の商人と争論を繰り返しながら急激に力を蓄えていきました。その様子は、今堀町の日吉神社に伝わる今堀日吉神社文書(重要文化財)にも記されています。また、この時代は、浄土思想の普及や禅宗の伝来によって新しい宗派が開かれた時代でもあり、本市では寂室元光が六角氏頼の招きに応じ、康安元年(1361)に臨濟宗永源寺派大本山永源寺を開きました。

15世紀後半、幕府の力が弱体化すると、各地では国内支配をめぐる争いが激化します。近江では六角氏の重臣の一人であった伊庭^{いば}氏が勢力を増し、主家であった六角氏との間で争いを起こしました。また、永禄6年(1563)には、当主である六角^{よしかほ}義治が重臣の後藤氏の力を恐れ、後藤父子を殺害するという事件が起こりました。これに対し多くの家臣が反旗を翻し、六角氏は観音寺城を追われましたが(観音寺騒動)、一部の重臣の仲介によって帰城を果たしました。その後、家臣との間で「六角氏式目」を結びましたが、関係の回復は図れず、信長の近江侵攻にもはや太刀打ちできる力を失っていました。



今堀日吉神社



後藤館跡 門跡

(4) 近世(安土桃山～江戸時代)

戦国時代、尾張の織田信長が台頭し、足利義昭を奉じて上洛を目指します。近江はその途上に位置するため、信長は六角氏に協力を呼びかけました。しかし、六角氏がそれに応じなかったことから、永禄11年(1568)9月、観音寺城の目と鼻の先に位置する箕作城を一夜のうちに攻め落としました。それに驚いた六角氏が観音寺城を捨て甲賀へと逃走すると、六角氏の重臣の多くが信長傘下に入りました。天正元年(1573)、信長は鯰江城^{なまづえ}を攻め六角氏を討ちますが、この時、六角氏を援助したとして百濟寺も焼き討ちされました。

信長の天下統一が進む中、安土山に城が築かれ、城下で楽市楽座が開かれると自由な取引市場が発展します。一部の商人が持っていた特権を開放したことで、それまで権勢を誇っていた保内商人等の中世的な商人の衰退につながりました。

天下統一を目前にした信長でしたが、天正10年(1582)、明智光秀による謀反(本能寺の変)によって自刃し、安土城も焼失しました(特別史跡安土城跡)。

慶長8年(1603)に徳川家康が江戸に幕府を開くと、市域は井伊、伊達、市橋、最上、根来等の大名領や旗本領、寺領、幕府直轄領となり、各村には庄屋、横目、組頭等の村役人が置かれました。市域の農業は稲作が中心でしたが、芋、大豆、大角豆^{さきさげ}、粟、稗^{あわ}、黍^{ひえ}、大麦、小麦、桑、茶等の商品作物も栽培され、商品作物や魚肥の売買等、商人を介して町場とのつながりを広げました。特に、蒲生、神崎、愛知、犬上郡から台頭してきた近江商人は中山道や御代参街道等を利用して他国へ行商し、行商先からその土地の産物を購入して上方へ運ぶという商法(諸国産物廻し商法^{しょこくさんぶつまわ}、鋸商法^{のこぎり})で全国に商圏を広げました。

万延元年(1860)に井伊直弼が水戸浪士の襲撃により横死すると、その2年後に幕府は蒲生郡、神崎郡を含む井伊家の領地10万石を上知とします。これにより、彦根藩の米札が通用しなくなったことで米価は高騰し、騒動が起きました。慶応2年(1866)から3年にかけては、八日市及び愛知川宿(愛荘町)で米価の暴騰に憤った民衆による激しい打ちこわしが起こり、「ええじゃないか」が流行するなど混乱を極めました。



鯉江城跡(鯉江町)



御代参街道

(5) 近代・現代(明治時代～)

明治4年(1871)の廃藩置県により、市域は大津県・彦根県・山上県の三県によって管轄されましたが、明治5年(1872)9月、滋賀県管下に統一されました。当時、市域には200近い村がありましたが、明治22年(1889)の町村制施行によって22の村に統合されました。

交通面では、街道や橋梁等の整備が進められ、明治11年(1878)には、明治天皇の行幸に備え、愛知川の無賃橋が改修され「御幸橋」と名付けられました。また、明治22年(1889)には国鉄能登川駅が開設し、東海道線(現JR琵琶湖線)が全線開通しました。明治31年(1898)には近江鉄道愛知川―八日市間が開通し、同33年(1900)には彦根―貴生川間が開通しています。さらに、八日市と近江八幡を結ぶ湖南鉄道(後の八日市鉄道、近江鉄道)も大正2年(1913)に開通し、鉄道網の整備が進められてきました。

また、手書きが主流だったこの時代、蒲生岡本町出身の堀井新治郎がアメリカで開催されたシカゴ万博を視察し、エジソンが発明したミメオグラフを参考にした「謄写版」を考案しました。蠟原紙を鉄筆でこする「ガリガリ」という音から「ガリ版」の愛称で親しまれ、コピー機が普及する1970年代まで全国で利用され、日本の近代化を支えました。

大正4年(1915)には、八日市の沖野ヶ原に日本初となる民間飛行場が建設されましたが、町の財政難から航空大隊誘致運動を展開し、大正11年(1922)に陸軍八日市飛行場として開設されました。太平洋戦争が勃発すると、陸軍八日市飛行場は重要な基地の一つに数えられ、戦争末期には布引丘陵に戦闘機を隠す掩体が造られました。昭和20年(1945)の終戦によって陸軍八日市飛行場は閉鎖され、飛行場跡地は払い下げられ、農地として開墾されました。

戦後は復興と相まって、大中の湖干拓事業、愛知川農業水利事業、永源寺ダム建設等の大型事業が順次進められていきました。また、愛知川をはじめとする市内の河川は、大雨のたびに堤防が決壊するため、堤防復旧や河川整備等が何度も行われてきました。

一方、交通面では、昭和39年(1964)には名神高速道路関ヶ原―栗東間が開通し、市域には八日市インターチェンジが設置され、平成23年(2011)には蒲生スマートインターチェンジ開設し、インターチェンジ周辺では工業地化が進みました。

なお、戦中から戦後にかけて行われた町村合併によって、八日市市、永源寺町、五個荘町、愛東町、湖東町、能登川町、蒲生町が誕生し、平成17年(2005)、18年(2006)の2度の合併によって現在の東近江市が誕生しました。



近江鉄道新八日市駅舎



コンクリート掩体

行政区画の変遷

M22 1889年	M23 1890年	M25 1892年	M27 1894年	M30 1898年	S02 1927年	S17 1942年	S18 1943年	S29 1954年	S30 1955年	S46 1971年	H17 2005年	H18 2006年
八日市町	中野村	建部村	御園村	市辺村	玉緒村	平田村	八日市町	八日市市			東近江市	東近江市
東小椋村	東小椋村	高野村	山上村	市原村	永源寺村	永源寺町						
東五個荘村	旭村	北五個荘村	南五個荘村	豊椋村	湖東町	五個荘町						
西押立村	東押立村	角井村	西小椋村	愛東村	愛東町							
八条村	伊庭村	能登川村	五峰村	能登川町								
八幡村	栗見荘村	八幡村	栗見村									
朝日野村	栗見村											
桜川村								蒲生町				